
カテキョ

来城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カテキョ

【Nコード】

N7471X

【作者名】

来城

【あらすじ】

お隣に住んでいたお兄ちゃんは、今は私のカテキョで、私の好きな人だったりする。

シャイなお兄ちゃんとシャイな私のちょっぴりじれたい恋愛事情。

携帯サイトからのお引越しです。

Lesson 1

午後8時、5分前。

時計で確認して、深呼吸を1つ。

「よし」

私は部屋を出て、玄関に向かう。

階段を降りきったところで、ピーンポーンとインターホンが鳴った。

相変わらず、時間ぴったりに。

「はぁーい！」

ガチャリ。ドアを開けると、そこにはカテキョの先生。もとい、小さい頃から知っている4つ年上のお隣のお兄ちゃん。さらにもとい、私の大好きな人が立っている。

「こんばんはー、お兄ちゃん」

「こんばんは、亜美ちゃん」

お兄ちゃんは柔らかく微笑む。

もうほんとカワイイ。なんなんでしょう、男性にあるまじきこの可愛さは。この笑顔が見れるなら勉強だって頑張りますって話だ。

週一回、午後8時から午後10時までの2時間のカテキヨをお兄ちゃんにお願いしてから、もう三ヶ月が経つ。

それなのに、いまだに気持ちを伝えられずにいる。

このまま、ずっと先生と生徒のままだったらどうしよう……なんて、不安になったりもする今日この頃。

どげんかせんといかん、と元宮崎県知事の真似して自分に言い聞かせても、なかなか難しくくて。

「そ、それじゃ、はじめようか」

「はい」

「今日は数学だったね」

お兄ちゃんは、部屋の中央にあるローテーブルを挟んだ斜め右に座ると、テキストを開く。

本当は数字も見たくないくらい大っ嫌いな数学だけど――

「よし、がんばるぞー」

「いつも意欲的だね」

「えゝ、だって」

「ん？」

「……教えてくれるのが、お兄ちゃんだから」

途端、お兄ちゃんの顔が赤くなる。

この反応、どうなんだろう。いい雰囲気ってやつなのかな？

でも、お兄ちゃんってすぐ顔赤くなるし。

そこがまたいいんだけど。私のこと、どう思ってるのか分からないのが困りもの。

「じゃ、じゃあ、今日はこのページから」

あーあ、スルーされちゃった。仕方ない。本当に頑張ろう、数学。私はシャーペンを手にとって、お兄ちゃんが開いたページに視線を落とした。

カリカリ。カリカリ——暫くは、集中して問題を解いていたけど、分からない問題にあたって、シャーペンが止まる。

顔を上げると、お兄ちゃんは頬杖をついてボーっとしていた。

昔から、たまにこういうことがある。こういつ時のお兄ちゃんは、軽く呼んだくらいじゃ気づいてくれない。

「お兄ちゃん」

「……」

「お兄ちゃん？」

「……」

やっぱりだ。私は身を乗り出して、お兄ちゃんに顔を近づける。さすがにこれなら気づくでしょう。

「……お兄ちゃん？」

「ん？ って、わぁっ！」

いきなり私の顔がアップになったからか、お兄ちゃんは飛び上がるほど驚いた。

「なんか失礼ー」

「ご、ごめん。急だったからびっくりして」

「ちゃんと呼んだよ」

「……わ、分かった。分かったから、とりあえず、離れて」

「どうしてえ？」

さらに近づいてみる。

お兄ちゃんは、ほんと困り果てたように落ち着きなくあちこちに視線をさまよわせている。

でも、たまに私のほうを見て——っていうより、私の服？　なんで？

不思議に思っ、お兄ちゃんの視線を辿ると、ボタンがいくつか開いたシャツ。

ま、まさか——私はあることに思い当たる。

もしかして、今までも？

私は、いつも制服で授業を受けている。だから、自然と短いスカートやら、胸元の開いたシャツでお兄ちゃんの前にいるわけで。

ちょ、ちょっと待って。私、そこまでは考えてなかった。どうしよう、恥ずかしい。

「……お兄ちゃんのエッチ」

「ちちちちちがつ！！　違う違う！　見てない！！　なんにも見てないっ！！」

「嘘だあ……」

「うっ、嘘じゃないよ！！！」

必死すぎて逆に怪しいよ、お兄ちゃん。カマかけてみよう。

「……恥ずかしいな、黒のブラ見られたなんて」

「え？　白じゃなか——あ！」

「やっぱり見てたんだあ！」

「……」

お兄ちゃんのバカ。こんな簡単な手に引つかかるんだから。

「ご、ごめん。ごめんね?」

お兄ちゃんは本当に申し訳なさそうにぺこぺこ頭を下げる。

そこまで謝らなくても、いいんだけどな。

そもそもちゃんとボタン閉めてなかった私が悪いんだし。しかも、その状態で前屈みになったのが悪いんだし。お兄ちゃんが見ちゃったのは、不可抗力ってヤツだもん。

「あ、亜美ちゃん?」

私が黙ったまままでいたからか、お兄ちゃんは、うかがうように弱気な視線を私に向ける。

しょうがない。

「……もういいよ」

「え?」

「怒ってないから」

「……ホント?」

「うん。でも……」

「でも?」

「もう見えないように、ボタン留めて……?」

これは嘘ついたことへのお仕置き。

お兄ちゃんが口をあけたまま固まる。次の瞬間には、林檎みたいに顔が真っ赤か。

「そしたら、許してあげる」

そう言って、お兄ちゃんの手を胸元のボタンへ引き寄せる。
しばらく迷った後、お兄ちゃんは意を決したように、震える手で、
1つずつ、ゆっくりとボタンを留めてく。

う、ちよつとやりすぎたかも……私の方が恥ずかしいよ、これ。

「……お、お兄ちゃん」

もういいよ、と言おうと思って呼びかけると、お兄ちゃんが顔を
上げる。

そうすると、思ってたよりも顔が近くて。あと少し動いたら唇と
唇がくっついちゃいそう。

そんなことを考えていると、不意にお兄ちゃんが私の体を引つ張
って

「えっ？」

その勢いで私とお兄ちゃんの唇が合わさろうとした。
その瞬間。ノックの音がした。

「うわっ!」

「きやあっ!？」

突然のノックにびっくりしたのか、お兄ちゃんが私を突き飛ばす。
ちよつとひどい……

「あらあら、またじゃれ合ってたの。あんまり亮君を困らせちゃダ
メよ、亜美」

タイミングの悪いノックをした張本人、お母さんがケラケラ笑いながら言う。

昔からよく知っているお兄ちゃんが、まさかたった今私とキスしようとしてたなんて考えもしないんだろう。

「はい、亮君、お茶どうぞ」

「あつ、ありがとうございます……」

よっぽど喉が渴いていたのか、お兄ちゃんは出されたお茶を一気に飲み干す。

「あらあ、いい飲みっぷりねえ」

「は、あ、いや、喉渴いていたので、すみません」

「そうでしょうねえ。ホントこの子になにか教えるのって大変なのよねえ」

「い、いえ、そういうわけじゃ……」

「ちょっと、お母さん！ お茶出したらさっさと出てってよ。勉強できないでしょ」

なんだかこのまま居座りそんな気配をみせるお母さんに、そう言う。

「はいはい、それじゃ、亮君、よろしくね」

「あ、はい」

「亜美、しっかり勉強するのよ」

「分かってる」

余計な言葉を付け加えてお母さんは部屋から出て行く。

はあ……さっきの続き、なんてムリだよねえ。タイミング悪いんだから、お母さんったら。

「……それじゃ、勉強しよっか、お兄ちゃん」

仕方なく、私は机の上のテキストに視線を落とす。

「……亜美ちゃん」

「んー、なに？」

「さ、さっきはその、ごめんね」

キス、しようとしたことに対してだろうか？ それとも、ノックにびっくりして思わず私を突き飛ばしたこと？
どっちにしても、謝られるのは、なんかヤダ。

「……謝っちゃヤダ」

「え？」

「……今度は、続き……期待してるね」

「亜美ちゃん……」

「今度は、突き飛ばしちゃだよ」

「う、うん」

お互い、顔を真っ赤にさせて。自分達の行動を思い出し、また照れる。

先生と生徒。今日は、その関係から少し進んだのかも。

私たちが恋人同士になれる日は来るのかな？ ね、お兄ちゃん？

Lesson 2

夏休みが始まった。といっても、午前中は補習だったり部活だったり、午後は友達と遊んだり、色々忙しい。

でも、お兄ちゃんが来る日だけは、ちゃんと家にいるようにしていた。

今日だってそう。

それなのに、夏の暑さと遊び回っていたツケに負けて、私は襲ってくる眠気に勝てず、ベッドに突っ伏してしまった。

もちろん、お兄ちゃんが来るまでには、シャキッと起きているつもりだったのだけれど。

ふと髪を撫でられたような感覚に薄く目を開けると、お兄ちゃんがすごく優しい顔で私の髪に指を滑らせていて。びっくりして、思わず寝た振りをしてしまった。

お兄ちゃんは、私が起きたことに気づいていないのか「……よく寝てるなあ」と、しみじみ言いながら、私の目にかかった前髪を払ってくれた。

その手が、流れるように私の頬にそっと触れ、そこでピタリと止まる。

目を閉じていても、お兄ちゃんの視線を感じる。なんだかドキドキしてきた。

お兄ちゃんが、今、なにを考えているのかはわからない。

でも、私は少しだけ期待してしまう。

二人っきりの部屋。

前、出来なかったキス。お兄ちゃん、してくれないかなって。

頭の中に浮かんできたその光景は、どんどんどんリアルさを持つていく。自然と頬が熱くなるのを感じる。私の頬に手を触れているお兄ちゃんに、その熱が伝わっちゃうんじゃないかなって不安になるくらい。

そんなことを考えていると「……亜美ちゃん」不意に名前を呼ばれた。

一瞬、寝た振りがばれたのかと思ったけれど、違った。

お兄ちゃんの吐息が近くなって——チュツと額に落ちてくる唇。

してくれた！唇じゃないけど、してくれた！！

嬉しくて、嬉しくて。

「……お兄ちゃん」

無意識のうちに言葉が零れた。

「え？」

お兄ちゃんがぎくりとした声を出す。

このタイミングで呼んでおいて、寝た振りを続けるのはちよつと無理があると思って、もう目を開けていた私とお兄ちゃんの視線が合わさる。

「……………」
「……………」

しばらくの沈黙。

私の頬はピンク色のままで、逆にお兄ちゃんの顔色は青く、青白くなっていく。

「あつ、ああ亜美ちゃん!!! 起きてたの!？」
「ご、ごめんなさい!!!」

ベッドからガバツと起き上がって頭を下げる。

お兄ちゃんの顔色は、青白くから真っ赤に変わっていた。

「あ、あのね、さ、最初は本当に寝てたの! ホントだよ」

「…………い、いつから?」

「えっと…………髪の毛、触られた時に、その」

「…………」

「ご、ごめんなさい」

「や、こ、こっちこそなんて言ったらいいのか…………その、ごめん」

お互い、真っ赤になって謝って。勉強する時間なのに、謝る時間みたいで。

放っておくと、ずっと謝り続けちゃいそう。私はとにかくとして、お兄ちゃんが。

「——お、お兄ちゃん、そろそろ勉強しよ勉強!!!」

だから、そう助け舟を出す。

「あつ、そ、そうだね。そうそう、勉強勉強…………えっと、今日は2

00ページから」

「お兄ちゃん、これ180ページしかないんだけど」

「……あ」

動揺して、混乱しているお兄ちゃん。そんなお兄ちゃんが可愛く
思えて、私の顔はだらしないほころんでしまった。

なんとかお兄ちゃんを落ち着かせて、勉強を開始したのは、それ
から数分後。

ただ、なんていうか、寝起きっていうのもあって、いまいちはか
どらない。

「……大丈夫？ まだ眠たそうだけど」

見かねたのか、お兄ちゃんが心配そうに問うてくる。正直に答え
るべきかどうか迷う。

とりあえず「あは」と笑って誤魔化すと、お兄ちゃんは「今日は、
ここまでにしようか？」と言った。

「え？」

「頭が働かない時は、ムリしないで休んだほうがいいからね」

「……うーん。そしたら、お兄ちゃんは帰っちゃうの？」

もしも、そうならお兄ちゃんの言葉にノーを言わなきゃいけない。
だって、まだ家庭教師の時間は1時間半も残ってるんだから。

「亜美ちゃんが眠くて死にそうなら帰るけど」

「だ、大丈夫だよ。私、眠るよりもお兄ちゃんと話したい」

勢いに任せて言ってしまった。

お兄ちゃんの顔がまた赤くなる。多分、私も。

「……ま、間違い」

「え？」

「今の間違い。お兄ちゃんの話が聞きたい。こっちにする」

最近のお兄ちゃんのこと聞けるし。

「俺の話？ ……そう言われても、なに話せばいいかな」

お兄ちゃんは少し困ったように頭をかく。

「えっとねー、じゃあ、私が質問していい？」

「いいよ、答えられる範囲なら」

「うん」

頷いたあと、えへへと笑う。その顔を見て、お兄ちゃんも笑う。すごくいい感じの空気。

さて、なにを聞こうかな？

隣のお家に行けば会えた昔と違って、一人暮らしをはじめた今のお兄ちゃんのことを、私はあんまり知らない。通っている大学は知ってるけど、どんな生活を送っているのかは分からない。

「うーんとねえ、お兄ちゃんは大学でどんなこと勉強してるの？」

「先生になる勉強だよ」

「へー、お兄ちゃん、学校の先生になりたいの？」

「うん」

「いいなあ、お兄ちゃんの生徒になる子たち」

「なに言ってるの？ 亜美ちゃんは、俺の一番最初の生徒なのに」

サラリと笑って言われた言葉にドキツとする。

お兄ちゃんは、私のドキドキにまったく気づいた風もない。

たまーにこういうドキツとすることを自覚なしで言うんだから……

「……そ、そっかぁ。そういわれたら、私、お兄ちゃんの生徒だよ
ね」

「うん」

「で、でも、やっぱり学校の先生だった方が嬉しいかなあ」

「え、なんで？」

「だって、そしたら、毎日会えるし。担任の先生、お兄ちゃんだっ
たらよかったなあって思って」

「でも、それだと、亜美ちゃんばかり^{ひいき}贍して、他の生徒とか親
御さんたちに怒られちゃいそうだよ」

ま、またそういうことをサラツと言っただから。

「そっかぁ」って気の利かない返事しか出来なくなる。

なんかさつきからペースがつかめない。少し落ち着くために深呼吸
吸して。

お兄ちゃんは質問されることが楽しくなってきたのか「他には聞
きたいことないの？」なんて、のんきに聞いてくる。

「あ、あるよ。えっと、お兄ちゃん、今、どこに住んでるの？」

「結構、近くだよ。こっから電車で2つのところ」

そう言っ、お兄ちゃんは聞き覚えのある駅名を教えてください。

「本当に近いね。昔みたいに遊びに行っちゃおうかな……なーんて
ね」

言ってる途中でお兄ちゃんの表情が硬くなったから、冗談のフリ
をして誤魔化した。

ショックで顔が引きつるのが自分でも分かる。気づかれないように無理矢理笑ってみせると、お兄ちゃんは「あ、えっと、ダメってワケじゃないんだけど」と、慌てたように言った。

「ホントに？」

「う、うん。ただ狭いよ」

「平気！」

「そ、そっか。じゃあ、亜美ちゃんが暇で、俺が家にいる時にでもおいでよ。電話くれたら大丈夫だから」

照れくさそうにポリポリと頬をかくお兄ちゃん。

お兄ちゃんがすごく頑張って言ってくれたのが分かる。

なんだか、嬉しすぎて、少しの間、言葉が出てこなかった。

そんなこんなで話をしていると、1時間半なんてあっという間。いつのまにか時計の針は10を指していた。

お兄ちゃんを玄関で迎えるのが恒例なら帰りは門の前まで見送るのも恒例。

「それじゃ、また来週」

「うん。バイバイ、お兄ちゃん」

手を振ってお兄ちゃんの背中を見送る。いつもと同じ光景。

でも、なんかいつもと違って——来週まで我慢できそうにない。

「お兄ちゃん！」

後姿を呼び止める。お兄ちゃんが不思議そうに振り返った。

「あ、あの、明日ってなにか用事ある？」

「明日は……多分、なにもないけど」

困惑した顔でお兄ちゃんが答える。

「あのね、私……来週まで待てそうにないから、明日もおにいちゃんに会いたい……です」

私の言葉にお兄ちゃんは、ぼかんと口を開けて固まってしまった。

「……ダメ？」

不安になって問うと、お兄ちゃんは「ダ、ダメじゃないよ」と、首を何度も勢いよく横に振る。

「じゃ、じゃあ、明日、駅に着いたら電話するね」

今度は首を何度も勢いよく縦に振る。

明日、お兄ちゃんの首が筋肉痛にならないかちょっと心配。

「そ、それじゃ、また……明日」

「うん、おやすみなさい」

改めて、お別れの挨拶をして。

いつもなら、これから一週間我慢しなきゃいけないけど、明日にはまた会える。今日はいい夢が見れそう。

Lesson 3

「……えへへ」

お兄ちゃんと約束した次の日。私は、にやける顔をとめることができずにいた。

今までは、週に一度しか会えなくて、それもたったの2時間。そんなの、少なすぎると思っていた。それが昨日の今日で、またお兄ちゃんに会えるのだ。にやけずにはいられない。

「ふふ……」

——ああ、ダメだ。

今はめちゃくちゃシリアスな古文の補習中。お兄ちゃんが教えてくれる教科じゃないから、ちゃんと聞いておかないと、ついていけなくなる。

なのに、にやける顔はやっぱり止められなくて。だって、学校が終わったらお兄ちゃんに会えるんだもん。そんなっちゃっても、仕方ないよね。

「……神田あ、随分幸せそうだな」

「はいっ、そりゃあもう!!!」

「そうかそうか。そんなに古文が好きか。じゃあ、ここを訳してもらおうか」

「うえ？」

ほとんど上の空で聞いていたせいで、結局、上手く訳せなくて怒られた。

にやけすぎるのも考えものかもしれない。
少し反省して、それからは顔が緩みそうになるのをどうにか抑えた。

そんな古文の補習が終わるなり、隣の席の奈津子が呆れたような顔で「……亜美さあ、今日、超キモイんだけどなんかあった？」と声をかけてきた。

「キモイ？」

「にやけすぎてキモイ」

「ひどーい」

そうは言っても、にやける頬は止まらない。何を言われても嬉しいのだ。

「マジ、あんた、ヤバイ薬きめてない？」

「きめてない。そうじゃなくて、今日はね……ふふふ」

「思い出し笑いとかマジキモイからやめて」

「なに言われても今日は怒らないよー」

「……なに？ なにがあるの？」

「よくぞ聞いてくれました！ 今日はね、お兄ちゃんの家遊びに行くんだあ」

「お兄ちゃん？」

奈津子が少し首を傾げる。

「亜美、お兄ちゃんなんていたっけ？」

「え？ あ、違うよ。お隣に住んでたお兄ちゃん。今は一人暮らしなんだけど、家庭教師に来てもらってるの」

「へえー。どんな人？ かつこいいいの？」

「んー、かつこかわいい感じで超優しいの」

「年は？」

「4つ上」

「いいじゃん、年上。で、付き合ってるわけ？」

うつ……これはちょっと嫌な質問。

「……ま、まだだけど」

思わず口ごもると、奈津子は「なーんだ」と、拍子抜けしたように言った。

「で、でも、今日は進展させるつもりだもん」

「へえ、ってことは、一気に2人で朝を迎えちゃうとか？」

奈津子がからかうような笑みを口元に浮かべて言う。

ふ、二人で朝！？　そ、それって——頬がカッと熱くなるのを感じる。

「そ、そこまでの進展は考えてないよっ！」

「でもさ、亜美にその気はなくても、相手がどうかは分かんないよ」

「」

「……分かるよ。お兄ちゃんにもその気はないと思う、多分」

「どうして？」

「どうしても」

キスでさえほっぺ止まりの『超』がつくほどシャイでウブなお兄ちゃんのことだ。多分じゃなくて絶対。

もうちよっとう行動に移してくれたらなーって思う気持ちもある。

でも、そんなところも可愛いつて言ったら、それまでなんだけど。

「まあ、いいじゃない。とにかく、私は今ハッピーなんだから」

「そりゃ、よかったね。でも、次はにやけない方がいいよ？」

「……分かってるよう」

さっきみたいににやけすぎて当てられるのは御免だ。

私は頬をペチペチ叩いて、にやける頬を抑えるように努めた。

髪型よし。制服のボタンよし。香り、よし。顔、いつでもよし。
なんてね。

駅のトイレで自分の姿を確認後、お兄ちゃんに、今、駅にいることを電話で伝える。

「すぐ迎えに行くよ」と言っただお兄ちゃんは本当に言葉どおり、すぐに来てくれた。

「お待たせ」

「全然待つてないよー」

「そ、そっか。じゃあ、いこうか」

「うん」

二人並んで歩く。なんだか緊張する。これからお兄ちゃんの部屋に行こうとしているのだから、緊張するのは当然だけど。奈津子に変なこと言われたせいで余計に意識しちゃう。

そんなことを考えているうちに、お兄ちゃんの住むアパートに到

着した。

「汚いところけど」

「お、お邪魔しまあす……」

お兄ちゃんと会うのは、いつも私の部屋。それが場所を変えたただけで、こんなに変な感じになるんだろうか。ドキドキすぎて死んじゃないそうだ。

「今、飲み物用意するから、そこ座ってて」
「う、うん」

言われたとおりにクッションに腰を下ろす。

自分自身を落ち着かせるために、お兄ちゃんの部屋チェック開始。

なにがあるかなあ？ って、チェックするほど物がない。本当に生活必需品しか置いていないみたい。これぞシンプルイズベストって感じた。お兄ちゃんらしいといえば、らしいかな。なんて、ある意味、感心していると「はい、どうぞ」と、お兄ちゃんが私の前に淹れたての珈琲を置いてくれた。

ちゃんとミルクと砂糖が二つずつついている。私の好み、把握されまくってる。

「ありがとうー」

なんとなく気恥ずかしくて俯き加減でお礼を言う。

お兄ちゃんは何処に座ろうか少し迷ったような素振りを見せ、やがて、ベッドに腰掛けた。

「じゃ、なにしようか？」

「え？ えーつとねえ」

元々、お兄ちゃんに逢いたくて家に来ただけだから、特に部屋で何かしようという目的もない。

かといって、ここで勉強するっていうのも、どうだかって感じだし。いや、教えてほしいことは一杯あるけど。それは次の家庭教師の時間で間に合うし。どうせなら、2人っきりの時間を大事にした
い。

考えて考えて、私はいいことを閃いた。時刻もちょうどいい時間。

「ねえ、お兄ちゃん、もう夜ご飯食べた？」

「いや、まだだけど」

「じゃあじゃあ……私が作ってあげよつか？」

「亜美ちゃんが？」

「うん」

「でも、家で食べるんじゃないの？」

「そうだけど、お兄ちゃんの分だけ作るっかなあって？」

「い、いいの？」

「うん！！」

「……じゃあ、お願いしようかな」

「任せて！」

はりきって腕まくりなんかしてみる。

綺麗に手も洗って、料理する気は満々だ。

……さて、なに作ろう？

「冷蔵庫見ていい？」

「いいよ」

冷蔵庫を覗いてみる。

中身、玉子とタマネギだけってビツミョー。

冷凍庫も覗いてみる。冷凍庫には、氷しか置いてなかった。

こんなんでいいのか、大学生！？　こんなに何もなかったら栄養が足りないじゃん。

お兄ちゃんの体が、心配になってくる。

「お兄ちゃんって、いつも何食べてるの？」

「えーっと……ラーメンとかコンビニ弁当とか、あとは、友達の違い入れ」

「……」

「……」

「とにかく今日はあ、卵あるから愛情たっぷりオムライス！　ケチヤップは、あるよね？」

「あるある、大丈夫」

食材はないのに、ケチヤップの他、やたらと出て来る調味料。

調味料を揃えるくらいなら、食材にもう少し気を回したらいいのに、と思っただけ、口に出さない事にする。それに、お兄ちゃんが料理しないなら私が料理してあげればいいんだし。

頭の中では、エプロンをした自分と料理が出来上がるのを待っているお兄ちゃんの姿。まるで新婚さんだ。

私がそんな想像を膨らませている間にお兄ちゃんはというと「じゃ、俺は米研ぐね」と、さっさと調理を始めてしまう。

「わ、私が研ぐよ」

「いいっていいって、これくらい」

「そう？　じゃ、お願いします」
「はい、お願いされます」

正直、お米って炊き上がったところしか知らない。
とにかく、水洗いしたらいいんだと思っていただけ、お兄ちゃんが
がしているのを見ると、それはちょっと間違った認識だったのかも
しれない。

ジャーと水出して、ある程度溜まったら、水を止めて手でジャコ
ジャコ掻き回す。

水の色が白くなってきたら、釜を傾けて水を流す。

今後のために覚えておこ。

また料理する機会があったら、今度はお兄ちゃんには座って待つ
てて欲しいしね。

それにしても、こうしてお台所で隣に並んで料理をしていると（
私は見てるだけだけど）、やっぱり新婚さんって感じでいいなあ。

「ね、お兄ちゃん」

「んー？」

「なんかさ、私たち、ちょっと新婚さんっぽくない？」

「え！？」

よっぽど驚いたのか、お兄ちゃんは手から釜を落つことしそうに
なった。すんでのところでキャッチしたから大丈夫だったけど。

「そんなに驚かなくてもいいのに」

「いや、だって……」

「嫌だった？」

「そうじゃなくて……ちょっとそう思ってたから、俺も」

お兄ちゃんは、私から視線を逸らしぼそぼそとそう言う。
言った人がそこまで照れてちゃ、聞いている人はもっと照れちゃう。
なんだか心がくすぐつたい。

「……お兄ちゃん」

好き。大好き。ウブなお兄ちゃんが、超好き。もう気持ちがマッ
クス過ぎて抑え切れないよ。

告白するなら。

告白されるなら。

今かも、しれない。

「「あ、あの——」」

二人同時に、言葉を発したその時だった。インターホンも押さず、
ノックもなしに誰かが部屋に入ってきたのは——

「どうもー、夜ご飯のおすそわけにきましたよー!」

スタイルよくて、綺麗で、なんていうか、一言で表すと——大人の
女性。

突然、現れたこの美女は一体、何者!?

「菊池さん!?!」

お兄ちゃんが驚いたように言う。

菊池さん? だから、何者なの?

くいくいとお兄ちゃんの袖を引っ張って小声で「誰？」と問うと「大学の友達」と、返事が返ってきた。慌てた様子もない。

言葉どおりに受け取っていいんだろうか。うーん。

「……あれ？ お客さんだった？」

菊池さんはお兄ちゃんの隣にいる私に気づくと、困ったような微笑を浮かべた。

「あー、うん。実家の隣に住んでる子。今、家庭教師やってるんだ。神田亜美ちゃん」

「……あ、どうも初めまして、菊池陽子です」

「は、初めまして、神田亜美です」

ペコリと頭を下げ、様子を窺う。

菊池さんは私とお兄ちゃんを交互に見やり、なにやら悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「んーんーんー、もしかして、私、恋人たちのスイートタイムに入ってきたお邪魔虫ってやつ？」

「い、いきなりなに言ってるんだよ」

「いいのいいの。そんな顔赤くして否定しなかったって」

じゃれあうような言い争いをはじめ、お兄ちゃんと菊池さん。菊池さんと話しているお兄ちゃんは、いつも私が見てるお兄ちゃんとはまた違って見える。

なんだろ。なんかモヤモヤ。

っていつか、スタイルいいし、顔キレイだし、大人だし、普通に考えて、勝てる要素が見当たらない。

お兄ちゃんは、本当は菊池さんみたいな大人の女性が好きなんだろうか。だとしたら、今の自分は、全然、お兄ちゃんの好みと違う気がする。

……これは、ピンチかもしれない。ウカウカしてたら、今、目の前にいる人にお兄ちゃんを取られてしまうかも。

「お兄ちゃん！」

「はっ、はい！？」

「……私、今日は帰るね」

「えっ！？ ちょ、ちょっと亜美ちゃん？」

「でも、期待してて」

「……な、なにを？」

「今日明日で大人の女性にはなれないと思うけど、私、頑張るから！」

そう宣言して、お兄ちゃんの部屋を出る。

全く状況がつかめていないお兄ちゃんはすぐに追いかけてきてくれたけど、私は階段を駆け降りて、降り終わった所でお兄ちゃんを振り返った。

「またね、お兄ちゃん」

手を振ってまた走り出す。

お兄ちゃんは呆気に取りられたような顔をしていた。

このあと、お兄ちゃんが「……オムライスは？」と、呟いたのは、
私のあずかり知らぬ話。

Lesson 4

お兄ちゃんからデートに誘われた。

いつもの時間。私が問題を解いている間中、お兄ちゃんは頬杖を付き、どこか不機嫌そう。時折、大きく溜息までして。問題を解くのが遅すぎて、イライラさせているのかもしれないと私は申し訳なくなった。

「……ご、ごめんね、遅くて」

「え？」

「私がなかなか出来ないから、怒ってるんだよね」

「……ち、違うよ。そうじゃなくて。ちよつと考え事っていうか」

お兄ちゃんはそこで言葉を区切り、ポケットから勢いよくなにかを取り出した。

バンと机の上に置かれたそれは、映画のチケットで。

「こ、これ貰いものなんだけど……よかつたら一緒に見に行かないかなって」

「え……？」

「い、嫌だつたらいいんだ。全然」

「や、やじゃないよ」

「ほんと？」

「うん」

「あー、よかった」

ホッとしたように笑うお兄ちゃんが、愛しい。これってデートだよね？

それから勉強はそっこのけ。待ち合わせ場所と日時を決めることに一杯になってしまった。

二人して舞い上がってしまった結果、お兄ちゃんは私にチケットを渡すのを忘れて帰ってしまい、私もチケットのことをすっかり忘れていた。

後でそのことに気づいたけど、当日受け取っても問題はないだろうと、あまり気にしないことにした。

だから、私は当日まで知らなかった。お兄ちゃんが誘ってくれた映画が、今一番人気の、ホラー映画だったなんて。

そして、約束の日。夏休み中ということもあり、映画館の前にはたくさんの人。

ここでの待ち合わせは失敗だったかも——私はキヨロキヨロとお兄ちゃんの姿を探す。

お兄ちゃんが超奇抜な服を着てくれたら、すぐに分かるんだけど……普段の服装から考えたら、そんなのありえないしなあ。

想像したらちよつと笑えた。

ヤバイヤバイ。一人で笑う変な子になってる。

私は顔を戻して、時計に目をやる。

約束の時間より10分前。

早く来すぎちゃったかな。

突っ立っているのも疲れるので後ろの柱に寄りかかる。

「亜美ちゃん！」

程なくして、お兄ちゃんがやってきた。時間ぴったりだ。

「ごめんね、遅くなって」

小走りで駆け寄ってきたお兄ちゃんは、開口一番にそう言った。

「時間ぴったりだよ」

「でも、待たせちゃったみたいだから」

「いいのいいの。待つのもデートのうちだし」

「デ、デート？」

聞き流してくれればいいのに「丁寧」に反応してくれるお兄ちゃん。
デートでいいじゃん、バカ。

「違うの？」

「え……あ、ち、違わない、かな」

よく出来ました。

私は、ニツコリ笑ってお兄ちゃんの手を握る。

大丈夫、この人混みだもん。赤くなってる私の頬なんて誰も気にしない、はず。

私はお兄ちゃんの手を引っ張って、映画館の中へ向かう。

「あ、亜美ちゃん、入り口そっちじゃないよ」

「え？ だって、これ見るんじゃないの？」

私が入ろうとしたのは、泣けると評判の恋愛映画。
でも、お兄ちゃんがバッグから取り出したチケットは、怖くて泣けると評判のホラー映画のものだった。

こんな機会がなければ見ようとも思わない映画。出来れば、こんな機会つくりたくなかった。

「……こ、これ見るの？」

「菊池さんが福引かなんかで当てただけどさ、ホラーダメだからつてくれたんだよね。俺、これ見たかったらラッキー」

「そ、そうなんだ……」

勝手にライバル視してる菊池さんからのチケットっていうのもあれだけど、これってなにかの嫌がらせ？

まだ映画も見えてないのに泣きそうになってくる。

鈍感なお兄ちゃんはワクワクした様子で「亜美ちゃん、早く」と足取りの重くなった私を急かす。

「……お兄ちゃんって、子供みたい」

呟いて私は、大嫌いなホラー映画を上映する会場へ向かった。

映画が始まってから、数十分。
嫌な予感のするシーンではギョッと目を閉じて、なるべく見ない

ようにしているけれど、耳から入ってくる悲鳴や効果音だけではどうにもならない。

変に耳押さえたら、お兄ちゃんに気づかれちゃうし。
そんなわけで、私は既に限界を感じていた。

「……亜美ちゃん」

「……え？ な、なに？」

急に小声で話しかけられて、そっと目を開ける。

「大丈夫？」

「な、何が？」

「もしかして、ホラーダメだったんじゃない？」

「そそつ、そんなことな——キヤーツ！」

言い当てられて、思い切り目を開けてしまったのが失敗だった。
目を思い切り開けた所に見えたのは、えぐい死体。思わず、お兄ちゃんの腕へと抱きつく。

「……で、出ようか？ あんまり面白くないし」

その言葉に、ふるふると首を横に振る。

だって、面白くないって、絶対、ウソだし。

「そんな、無理して見なくても……俺が悪いんだし。ね、意地はらないで出よ？」

「……意地はつてないもん。それに、お兄ちゃん悪くない」

「亜美ちゃん……」

「だって、この映画超見たかったんでしょ？ だったら、私も見る。お兄ちゃんが見たい映画なら、一緒に見たいもん」

困ったようなお兄ちゃんの声にかぶせて言った。
お兄ちゃんは少し押し黙り、不意に私の頭を抱え込むように抱き
寄せた。

「……こうしてたら、怖くなるかな？」

頭の上からボソボソと囁かれる声。

かなり早いお兄ちゃんの心臓の音が聞こえる。

トクトク、トクトク。

聞いていると、さっきまでの恐怖がウソみたいに消えてゆくのを
感じる。

私はギュッとお兄ちゃんの体にしがみつく。

「あ、亜美ちゃん？」

「映画終わるまで、こうしてていい？」

「……う、うん」

「ありがとう」

それから、私たちはずっと無言で。

だけど、これまでよりもずっと近くにお兄ちゃんを感じた。

Lesson 5

夏休みが終わり、気がつけば秋も深まっていた。
秋といえば文化祭なわけで。その準備で、いつもより帰宅が遅くなった。

カテキヨの時間までには、余裕を持って帰れると思っていたけれど――終わった時には、ギリギリの時間。
どうにかお兄ちゃんがより先に家に着かないと。

「やばいやばいやばあい！！！」

駅を出て、私は家までの道を必死で走っていた。

カテキヨの時間まで、あと10分もない。

焦れば焦るほど、なかなか家に辿り着けない。途中で携帯を落っこしたり、信号に引っかかりたり、普段、やらないようなドジをしてしまう。

それでもどうにか駅前の大通りを抜けて、住宅街に入る。

ここから家までのルートは二つ。街灯が整備された明るい道と、薄暗い公園を突っ切る道。

いつもなら明るい方を通るけど――

「……こっちの方が近いし、ね」

少し迷って公園の道を選ぶ。

大丈夫。少し暗くて人通りがないだけで、ここで事件なんて起きたことないし、絶対大丈夫。

多少の不安を押し込めるように自分に言い聞かせる。

けれど、少し前から後ろで聞こえた自分以外の足音が妙に怖い。

気づかなければ、どれだけよかったか。

私が早足で歩けば、後ろの人も早足になる。私が足を緩めれば、後ろの足音もゆっくりになる。

「うう……」

待つてよ、ちょっと待つてよ。ホラー物とかも嫌いだし、体力だつて自信ないし。怖いんだつてば。何の嫌がらせなの、これ。

私がいくらそう思つても、後ろから聞こえる足音は消えてくれない。それどころか、どんどん近付いて――

「……お兄ちゃん、助けて」

小さく呟いた時、背後から「わっ！」と驚かされた。

その声に、今まで溜めに溜め込んだ恐怖がぶわつと出てきて、私は悲鳴と共に持っていた鞆をその人めがけて叩きつけた。

「うわっ!?!」

反撃されると思っていなかった相手は、鞆をもろに頭に受けて蹲ってしまった。その隙に逃げようと私は踵を返す。

「あ、亜美ちゃん……」

後ろから苦しそうな、だけど、聞き覚えのある声。

「え?」

慌てて振り向くと、頭を押さえて蹲るお兄ちゃんがいた。

「……だ、大丈夫？ 本当にごめんね」

場所は変わって、私の部屋。

あれから、どうにかお兄ちゃんをつれて、家に帰って。

びつくりするお母さんからアイスノンを受け取った私は「自分でするから」と遠慮するお兄ちゃんを制止して、負傷した箇所を押さえている。

「平気平気、これくらい」

「……ほんとに？」

「うん」

言葉とは裏腹にお兄ちゃんはどこか力なく笑う。

絶対、痛いんだ。嫌われちゃったらどうしよう……

「でも、ビックリしたよ。鞆ってすごい武器になるんだね」

「うう、ごめんなさい……」

「い、いや、あんなところで驚かそうとしたこっちが悪いんだし」

「そ、そうだよ。すっごく怖かったんだからね。変質者かと思っ
たもん……」

でも、そう思ってしまった自分が悲しい。

お兄ちゃんのことを好きなら足音で判別できるくらいにならないと。

私の中で、新たな目標が追加される。

お兄ちゃんは苦笑交じりに「……ごめんね」と言い、言葉が続けた。

「でも、あんな暗い公園を一人で歩いちゃダメだよ。危ないから」
「……う、うん」

なんて話していると、ノックの音がして「亜美ー、あんた、ご飯はどうするの?」と、お母さんがドアから顔を覗かせる。

そういえば、いつもは学校から帰って、お兄ちゃんが来る前に食べている夜ご飯。今日はお兄ちゃんと一緒に家に到着したので、まだ済ませていない

だけど、ご飯を食べていたら勉強する時間が減る。っていうより、お兄ちゃんと一緒にいる時間が減る。こっちの都合でカテキョの時間を延ばすなんてできないし。

「あとで食べる」

「そう? お腹なっても知らないわよ」
「ならないよ」

そう言った瞬間、くうっとお腹がなった。

な、なんでこんなタイミングで!? い、今の聞こえた?

おそるおそる隣に座るお兄ちゃんの方を見やる。

お兄ちゃんは、困ったような表情で「た、食べてきたほうがいいんじゃないかな?」と私を促した。

や、やつぱり聞こえたんだあ。なんか今日は最悪かも。
ずうんと落ち込んでしまう。

「ほら、亮くんもこう言ってくれてるし。どうせなら亮くんも一緒に食べたかどうか?」

「え、あ、いや、僕は済ませてきてるので」

「そう? おばさん、寂しいわあ」

何言ってるの、このおばさん。お兄ちゃん、困ってるじゃん。じやなくって――

こうなったら

「じゃあ、ここで食べる」

これしかない。

「そんな器用なこと」

「出来るから。ね、お兄ちゃんもそれでいいよね?」

「……亜美ちゃんとおばさんがそれでいいなら」

よし、オツケー。何問か問題が出来たら食べれるってルールにしちやえば、ちょっと楽しそうだし、お腹も満たされるし、オールオツケーだ。

「じゃ、持ってきて来るね」

まだ少し渋るお母さんの背中を押して一緒に二階へ降りる。

「まったくあんたって子は」

「いいじゃん。勉強もできて、ご飯も食べれて、一石二鳥」

「はいはい」

お母さんの呆れた声を背中に受けながら、ご飯を載せたお盆を手にもって、お兄ちゃんの待っている部屋に戻る。

「あ、おかえり……と、大丈夫？」
「うん」

意外と重かった夜ご飯をテーブルに置くのを手伝ってもらって、いつもの定位置に座る。

「ご飯は正面。ハンバーグのいい匂いが鼻をくすぐる。なんとなくやる気一杯。」

「じゃ、勉強しましょ、勉強」

「ああ、うん。じゃあ、この問題をしようか？」

「あれ？ これどうしたの？」

出されたのは、ノートに手書きされた数学の問題。

「亜美ちゃんが下に行ってる間につくったんだよ。正解した数だけ、ご飯食べれるってことにしたらどうかって」

「それって1問正解だったら、一口。で、2問正解だったら、二口、ってこと？」

「そうそう。ちょっと楽しいでしょ？」

「ふふ、うん」

それってさっき私が考えてたことと似てる。お兄ちゃんが同じようなこと考えてたなんて嬉しい。

「よし、がんばるぞー」

俄然^{がぜん}張り切って、私はお兄ちゃんお手製の問題に取り掛かった。

そして、答え合わせ。20問中15問正解と、今までの成績から考えたらなかなかの出来だった。

「それじゃ、15口食べていいよ」

「はい」

と、返事をしたはいいけれど。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「一口って、どれくらい食べていいの？」

「亜美ちゃんの好きなようにしていいよ」

昔みたいにこんな感じでもいいし、なんて言って、お兄ちゃんがぶくうつと頬を膨らませる。

「そんなことしてないよ」

「してたよー。俺のお菓子口いっぱい頬張ってさー」

「してない」

変なことばかり覚えてるんだから。まったくもう、と思いながら、ご飯に視線を落とす。

お兄ちゃんはニコニコと私を見ている。

さすがにこの年で口いっぱい頬張るなんて、ましてや、その姿をお兄ちゃんに見られるなんて恥ずかしい。

「んと、これくらいかな」

いつもの一口より気持ち少なめにして。

「いただきます」

もぐもぐ。……「っくん。」

「おいしい？」

「う、うん」

「数えてるからどんどん食べていいよ」

「……あ、うん」

……っというか、待つて。今、気づいたんだけど、この状況って、実はすっごく恥ずかしいくない？

口いっぱい頬張って食べてるわけじゃないけど、そんなこと以前に、好きな人に食事してる姿をまじまじと見つめられるのって……絶対、恥ずかしいよ。

思えば思う程、自分の顔が赤く染まってくのが分かる。こんな顔色、隠しようがないがなくていい。次の一口にも、なかなかいけない。

そうになったら、いくら鈍感なお兄ちゃんでも当然、私の様子がおかしいってことに気づく。

「……どうしたの？」

「あ、えっと……」

「なにになに？」

「たっ、食べてるとこ見られるの、ちょっと恥ずかしいなって気がして……」

「——あ」

カカカッと、一気に染まるお兄ちゃんの頬。それは顔にも耳にも伝染して。

「ご、ごめんっ！！　み、見ないから！！　食べ終わったら教えて
……！」

くるっと勢いよく回れ右をして、私に背を向ける。
少しの安堵。私はゆっくりと料理を口に運ぶ。

お兄ちゃんの背中はカチンコチンに固まったまま。チラリともこちらをうかがう様子は見られない。

なんか、なんだか。

自分で言っておいてなんだけど——同じ部屋にいるのに、お兄ちゃん私のほうを見てくれないことが、ちよつと寂しい、かも。

「……お、お兄ちゃん」

箸をお茶碗の淵に置いて。背中を向けてるお兄ちゃんの服の袖を引つ張る。

「な、何？」

「……」

「あ、もう食べ終わった？」

「まだ、だけど」

「そ、そう」

私の方へ向き直すのをやめて、また背中を向けるお兄ちゃん。私はもう一回、お兄ちゃんの服の袖を引つ張る。

「ど、どうしたの？」

「……やっぱり、こっち向いてて」

「……え？」

「だって、ちゃんとお兄ちゃんが数えてくれないと、私、ご飯全部食べちゃうよ？」

「え、で、でも……」

「お兄ちゃん、数えて」

声が震えてるのが、自分でも分かる。

こんな恥ずかしいお願いして、もしも、聞いてもらえなかったらどうしよう。

もう恥ずかしすぎて、全身茹でダコみたいだ。そんな顔見られたなくて、俯いて唇を噛んでいると、ゆっくりとお兄ちゃんが私の方を向き直る姿が見えた。

顔をあげると、やっぱりお兄ちゃんの顔も赤くて。

「……い、今、何回目？」

「えっと……5回目」

「……じゃあ、あと10回だね」

「う、うん」

お兄ちゃんに見られながら、箸を持つ手を再開する。

恥ずかしい。めちゃくちゃ恥ずかしい。でも、どこか嬉しい自分がいる。

今、お兄ちゃんの目に映っているのは私だけ。そんな喜び。

お腹が空いてるはずなのに、胸いっぱいになって。正直言って、味なんて全然分からなくなって。

こんなにもお兄ちゃんのことを好きな自分に驚く。

ずっとこんな瞬間が続けばいいのに。ずっと見つめてくれたらいいのに。心底、そう思う。

でも、お兄ちゃんの一言が私を現実に戻した。

「……10」

「あ、そ、そっか」

次の一口へと伸ばそうとした手を止める。第一回目の食事タイムは、これで終わり。

次は、またお兄ちゃんが作ってくれた問題をやるはずなんだけど、どうしてか、お兄ちゃんは動いてくれない。

「……お兄ちゃん？」

どことなく熱っぽいお兄ちゃんの瞳。その瞳は、私の顔でも問題集でもなくて、ただ、私の唇を見つめてて。

どうしようもなく恥ずかしくなって、私は俯いてしまった。

「あつ、ご、ごめん！ えっと、つ、次の問題、しないとね！」

あたふたと我に戻るお兄ちゃん。

お兄ちゃんが今、何を考えてたのかくらい、分かっている。料理を口に運ぶたびに、私の唇の方へ注がれたお兄ちゃんの視線をずっと感じてたんだもん。多分、私と同じこと想像してた。

次、頑張ったらしてくれるかな？ 今度はほっぺじゃなくて、唇に——そんな想いが強くて、意識しすぎた結果、次の問題は、15問中0問という惨敗っぷり。

結局、その日はカテキョの時間が終わるまで、私は料理を口にすることが出来なかった。

Lesson・6

文化祭まであと三日。準備もいよいよ大詰めを迎えて、学校中があわただしい喧騒に包まれている。そんな中、奈津子が言った。

「例のカテキヨのお兄ちゃん、文化祭に呼ばないの？」

「え？」

私は奈津子の問いかけに思わず作業の手を止める。

「だからー。例のカテキヨのお兄ちゃん、文化祭に呼ばないの？
って言ったんだけど」

「それは聞こえてたけど。なんで呼ぶの？」

「そりゃ、付き合ってたら当然でしょーが」

奈津子の勘違い。悔しいけど、私とお兄ちゃんはまだそんな仲じゃない。

私が黙っていると、奈津子はまずいことを聞いたという風に顔をしかませ「……もしかして、もう終わってる？」と、言った。

なんてことを！

「終わってないよ。始まってもないし」

即、否定する。すると、奈津子は目を丸くさせた。

「ウツソ！？ あんた、それじゃ、今までなにしてたの？」

「なにつて……勉強」

「じゃなくて……告ったり告らせるようにアピったりしなかったの

「？」

「し、してるけど、お兄ちゃんは鈍いし、照れ屋さんだし」

そこがいいんだけど、なんて言っていると、奈津子は呆れたように頭を振り

「……それってさ、女として見られてないんじゃない？」

なんてことを!!

「み、見られてるよ! ……多分」

即即、否定する。奈津子が、はつと鼻で笑う。

「その根拠は？」

「だって、キ、キスしてくれたし……ほっぺにだけど」

「今時、ほっぺって。小学生以下じゃん。お兄ちゃんって大学生でしょ。ありえないんですけど」

「ありえないって言われてもありえるんだもん」

「あー、分かった。ぶっちゃけ、お兄ちゃんってブサメン？」

「な! お兄ちゃんはカッコイイよ。ちよつと頼りないだけで……」

「カッコよかったら、普通もてるじゃん? そんな照れ屋さんとか考えにくいんだよね。慣れるだろうし」

「……それは、女の子に免疫があんまりないからだよ。お兄ちゃん、中高一貫の男子校だったし。私がかつちりマークして、近寄ってくる女の人は追い払っちゃってたし」

そう、お兄ちゃんがあんなにシャイで初心なのは、半分、いや、それ以上、私のせいでもあるのだ。いくら子供だったとはいえ、ちよつと悪いことしたなって今は思ってたたりもする。

「まあ、イケメンでもブサメンでもいいんだけど、文化祭には呼びなよ」

「どうして？」

「亜美が意外とモテること知ったら、なんか進展するかもよ」

「ありえないよ。私、モテないし」

私は溜息をつく。

奈津子が分からないという風に首をひねった。

「なんでそこまで嫌がるかなあ？」

そんな理由は簡単。うちのクラスの出し物。なにをとち狂ったのか、コスプレ喫茶なんてものをやることになっている。女子も男子も公平にくじ引きで、コスプレするものを決めたんだけど。

「あー、分かった。メイド姿が恥ずかしくて見られたくないとかあ？」

奈津子がポンと手を叩き、言った。

図星だ。コクリと頷く。

そう、私は『お帰りなさいませ、ご主人さま』ってやつで、有名なメイドさんの格好をすることになっている。

でも、これはまだマシな方。なんたって、本当はバニーガールだったのだ。

くじを持ったまま固まる私を見て、奈津子が代わってくれたから、なんとか出来る範囲のコスチュームになったけれど、それでも、やっぱりお兄ちゃんに見られるのは恥ずかしい。

「ふーん、なるほどねえ」

「だから、いいの。お兄ちゃんと呼ばなくて」

「いや、絶対呼んでもらう」

「なんでよー？」

「ぶつちゃけ、私がお兄ちゃんを見てみたいから」

奈津子はさも当然と言わんばかりに言った。ガクツと力が抜ける。

「あのねー、奈津子」

「そうそう、もし、呼ばないなら衣装交換なし」

「ちよつ、ちよつと待ってよ！？　なにそれ」

「脅迫というものです」

「あう……」

にこやかな奈津子の脅迫に私は抵抗する手段を持っていなかった。

そんなわけで。

二人きりのいつもの時間。休憩中に、私はお兄ちゃんに切り出してみた。

「お、お兄ちゃん」

「ん？」

「あ、あのね、今度の土曜日ってヒマ……じゃないよね？」

恐る恐る聞いてみる。

もし、ヒマじゃなかったら恥ずかしい格好を見られなくてすむわけ。

なかば祈るようにお兄ちゃんの返事を待つ。
でも

「多分、ヒマだよ」

お兄ちゃんは、そうニコリと笑った。

「そ、そうなんだ。なにか予定入る予定は？」

「予定入る予定？　ないと思うけど、なんで？」

「あ、ううん。大したことじゃないんだけど……」

「うん？　なに？」

こうなったら仕方ない。バニーガール姿を大勢の人に見られるよりは、メイド姿の方がまだマシだ。

「えっとね、これ、文化祭のチケット」

意を決して、ポケットの中に用意していたチケットをお兄ちゃんに差し出す。

「もし、来れたら……来て」

「あ、う、うん」

「無理しなくていいから。用事入ったらそっち優先し」

「なにがあっても行く」

私の言葉を遮って、お兄ちゃんが言う。

いや、そこまで力いれなくても……ちょっと嬉しいけど。

それから私たちは、文化祭当日の予定を話し合った。

それで気づいたんだけど、メイド姿をお兄ちゃんに見られないようにするのは、案外、簡単なことなのかもしれない。

午前中、私はコスプレ喫茶の仕事があるので、お兄ちゃんと一緒にはいられない。

だから、お兄ちゃんが午後から来てくれれば、その時にはもういつもの制服姿の私に戻っているっていう寸法だ。

そう考えて、コスプレの部分は伏せて、お兄ちゃんにそのことを伝えると「働いてる亜美ちゃんも見に行くよ」と、にこやかに言われてしまった。

コスプレ喫茶だって知ったらどんな顔するんだろう。

っていうか、メイド姿を見られることを抜きにしても、私のクラスを見に来るのはやめてほしかったりする。

だって、結構エッチイコスプレがあるんだもん。お兄ちゃんがそっちをガン見しちゃったりしたら、なんかすごくヤだ。

多分、ないと思うけど。それなら私のことガン見の方がいいかも。なににせよ、ただの喫茶店じゃないってこと、お兄ちゃんに言うておいたほうがいいかもしれない。教室のドア開けた瞬間、驚きのあまり卒倒なんてされちゃったら困るし。

「ねえ、お兄ちゃん」

「なに？」

「お兄ちゃんってコスプレ、好き？」

丁度、お茶に口をつけていたお兄ちゃんは、私の問いに「ぶはっ」とむせて咳き込んだ。

「だ、大丈夫？」

「……だ、大丈夫だけど」

まだ少し苦しそうな声で答えたお兄ちゃんは一度、咳き込んでから「急に变なこと聞かないでよ」と続けた。

「うん、ゴメンね。それで、好き嫌い、どっち？」

「えっと……なんで？」

「……文化祭でするから」

「コスプレを？」

「そう。コスプレ喫茶、みたいな」

お兄ちゃんの目がまん丸になる。それから「最近の高校ってすごいな」と感心したように言った。

「っていうか、うちの学校フリーダムすぎるの」
「なるほどね」

まん丸だったお兄ちゃんの目はもう落ち着きを取り戻して、柔らかに細められている。

「亜美ちゃんは、どんな格好するの？」

「え？……メイドさん」

「へえ。それは見ないともったいないね」

「え！？」

「メチャクチャ楽しみになってきた」

お兄ちゃんはうきうきしたように言う。

ちよっとお兄ちゃん？

なんかキャラが違うっていうか、もしかして、すっごくコスプレ好きですか？

今まで知らなかった事実、私は色々な意味で不安になった。

Lesson 7

文化祭当日。

我がクラスのコスプレ喫茶は思いのほか好評で、まさにネコの手も借りたいほどの忙しさ。

予想はしてたけど、折角、来てくれたお兄ちゃんと話すこともままならない。でも、もしヒマだったとしても、上手く話せたかどうか分からない。

だって――

10分ほど前に来店したお兄ちゃんの隣には菊池さんがいて。

「一緒に行くってきかなくってさ」

なんて、困ったように頭をかいたお兄ちゃん。

本当にそれだけなのかな、と嫌でも勘ぐってしまう。今だって仲良く話してるし。

「はあ……」

他のテーブルを片付けて、教室を二分しているパーティションの裏に入るなり、私は溜息をついた。

「なにそのふくれっ面」

色んな人に声をかけられていたウサギちゃん、もとい、奈津子がからかうような調子で言ってくる。

「……しょうがないでしょ」

両手でほつぺを押さえながら、そう返す。

奈津子は「まあねえ」と頷くと、パーティーシヨンの隙間からお兄ちゃんたちの席を窺いみた。

「あの女がライバルだったら超手ごわそう。っていうか、亜美に勝ち目なさそう」

「そこまで言わなくても……」

自分でも薄々思っていたことを言われて、がつくりと落ち込む。

奈津子がぼんぼんと慰めるように私の肩を叩き「落ち込むよりもまず突撃！ これ大事。テストに出るから」と、にこやかな笑顔で言い放った。

「……意味が分かんないんだけど」

「あの仲良しさんたちの席に突撃するってことよ」

言うなり、奈津子はパーティーシヨンから出て行くこととする。

「ダメだよ。仕事まだあるでしょ」

私は慌ててその腕を引き止めた。けれど、奈津子はやっぱりこやかに。

「仕事より大事なものがある！ 亜美が行かないなら私が行く。ぶっちゃけ、お兄ちゃんと話してみたいし」

「それが本音なんじゃん」

「だってさー、マジでイケメンじゃん。正直、もっとヒョロヒョロでばさばさ頭のキモメン想像してた」

そんなキモそうな人、好きにならない、と思う。

でも、どうだろ？ 中身がお兄ちゃんだったら？ 好きになったのかな？

うーん、想像できない。とりあえず

「お兄ちゃんは、かつこいいって言ったでしょ」

「うん。だから、一応、狙ってみようかと」

「なっ！？」

聞き捨てならない奈津子のセリフに言葉を失う。

奈津子は固まる私の目の前で手をひらひらさせたり、ほっぺをつんつん小突いてきたり。

そして、私がフリーズしてるのを確認し終わると「冗談冗談。私は友情を大事にする女ですよ」と、感情のこもっていない声で言った。

「……メチャクチャ棒読みなんですけど」

「あははー。と、冗談はさておいて、少しくらいならサボっても大丈夫でしょ。ちょっと話しにいこうよ」

「な、奈津子ー」

腕を引っ張られるがままにパーテーションの外に出る。

少しの間、サボっていたのを咎めるように、クラスメイトが、じとつとした目で私たちを見てくる。

「ねえ、奈津子。まずいつて。これ以上、仕事サボるの」

「大丈夫大丈夫。あとで話つけるから」

奈津子はそう言いながらも、クラスメイトに両手を合わせて無言のお願いをしている。

あとでじゃなくて、今、話つけてんじゃん。ってのは、おいとい

て——気がつけば、お兄ちゃんたちのテーブル近く。

「亜美ちゃん、もう終わったの？」

お兄ちゃんが聞いてくる。

「ま、ただだけど……」

「お兄ちゃん、この格好気にいつてくれたかな？　って亜美が心配そうだったから、つれてきちゃいました」

奈津子が口を挟む。まったくの大嘘だ。

文句の一つでも言おうと、奈津子を睨んだ。その時

「あ……えっと、よく似合ってるよ。すごくカワイイ」

お兄ちゃんが顔を赤くしながらも言ってくれた。
騙されてるよ、お兄ちゃん……

でも、嬉しくて、奈津子のウソにちよつと感謝。

「ホントすごくカワイイよ、亜美ちゃん」

「え？　あ、ありがとうございます」

菊池さんに言われると、ちよつと複雑。

「私はどうですかあ？」

「えっと……いいんじゃないかな」

奈津子の問いかけに、お兄ちゃんは困ったように答え、チラリと助けを求めるように私を見てきた。

それもそのはず。お兄ちゃんと奈津子は初対面だ。誰かも分から

ない人に馴れ馴れしくされたら、困って当たり前。

「お兄ちゃん、この子、奈津子っていつて私の友達なの」

仕方なく、奈津子を紹介する。

すると、お兄ちゃんは

「いつも亜美ちゃんがお世話になってます」

なんて、天然なんだか本気なんだか、よく分からない言葉を真顔で言つてのけた。ぷつと奈津子が小さく吹き出す。隣で菊池さんもクスクス笑っている。

それにも気づかずお兄ちゃんは「片瀬亮です、よろしく」と言葉を続けた。

笑いを堪えていた奈津子が小さく咳払いをすると「よろしく、亮くん。はい、シェイクハーンズ」と、お兄ちゃんの手を取り、握手をした。

お兄ちゃんは目が点。私もだけど。驚いている場合じゃない。変に思われないよう、さりげなく、奈津子とお兄ちゃんの間に入って入る。

「お兄ちゃん、私たちまだ仕事あるからそろそろ……えっと、菊池さんと色々まわってきたら？」

「え、でも」

「だって、ずつとここだと退屈でしょ？ 終わったらメールするし、ね？」

奈津子が口を挟めないように矢継ぎ早に言う。

お兄ちゃんは少し考えて「んー、じゃあ、そうしようか？」と、菊池さんに向けて言った。

「そうね。高校なんて久しぶりだし、楽しいかも」

菊池さんが頷き、二人は立ち上がる。

私はそんな二人が教室を出て行くのを見送って、はあ、と溜息をついた。

「こーのバカちゃんがあっ！」

奈津子が某ドラマのクサイセリフばかり言う先生の真似をして、私の頭をぺしつと叩く。

「いったいなあ」

「あんたって、ワケ分かんない。あれじゃ、応援してるみたいじゃん」

「分かってるよ……」

「せっかく、私が応援してあげてんのに」

やれやれと言いださんばかりの態度にカチンときた私は文句を口にする。

「なに言ってるの、奈津子がお兄ちゃんにベタベタベタするか
ら悪いんじゃない」

「あの女の様子を探ってたのよ」

「本当に？」

「ううん。本当は、あわよくば私が亮くんをゲットしようかと」

信じた私がバカだった。がつくりと肩を落とす。

「やっぱりそっちなんじゃん」

「ウソウソ。そんなことするわけないでしょ。私は恋愛より友情を大事にする女で有名なのに」

「はじめて知ったよ、そんなの」

「そりゃ、そうでしょ。今、そういうことにしたんだもん」

ケロッと言いつ切る奈津子にもうなにか言う気力もない。私は奈津子を置いて仕事に戻った。

「ちょっと亜美」

奈津子が慌てて追いかけてくる。

そして、私が気づかなかったことを小声で教えてくれた。

お兄ちゃんの態度。

私以外の人と話している時のお兄ちゃんは、赤くなったり、しどろもどろになったり、しないってこと。

他のコスプレ店員たちを見てもそうだったってこと。

それってつまり、私のことを意識してるってことなんじゃないかなって。

『終わったよー^^』

クラスでの仕事が終わったことをお兄ちゃんに教えるメールを送信する。

『そこで待ってて。すぐに行くから』

すぐに返事が返ってくる。

はい、と心の中で返事をして、私は教室の入り口でお兄ちゃんが来るのを待つことにした。

ちなみに奈津子はというと、委員長にもう少しだけ教室に居てほしいと懇願されて、珈琲を運んでいる。

渋々、引き受けたみたいだけど、さっき来たお客さんと意気投合したみたいで、今は楽しそうにその人と喋っている。だから、結果的にはよかったのかな。なんてことを考えていると

「ねえ、君さ、さっきメイドしてた子でしょ？」

いつの間にか私の前には見知らぬ男の人。

お兄ちゃんと一緒の年くらいだろうか？ でも、雰囲気が全然違う。ちょっと怖い。

「俺、客でいたんだけど覚えてない？」

覚えてない。私の返事を待たずにその人は言葉を続ける。

「ところで、もうヒマなの？ 俺、ダチとはぐれちゃってさー、ヒマなんだよね。よかったら一緒に回ってくんない？」

「え？」

「いいっしょ？ ね？ ね？」

「いえ、あの、私、待ち合わせしてるんで」

「えー、そんなこと言わないでよ。いいじゃん、行こうよ」

そう言って、男の人は私の腕をつかんでくる。

ちよっとなんなの、この人。怖すぎる。奈津子は、全く気づいてないし。どうしよう。どうしたらいいんだろう。お兄ちゃん——心

の中でお兄ちゃんに助けを呼んだ、その時。私の声が聞こえたかのようなタイミングで、お兄ちゃんが来てくれた。

「俺のカノジヨになにしてんの？」

そう言つて、お兄ちゃんは私の腕をつかむ男の腕を乱暴に振り払い、私を引き寄せる。

男の人はチツと舌打ちして、走り去っていった。

お兄ちゃんはその背中を確認すると、ふうつと溜息をつき、私に視線を向ける。

「大丈夫だった？　なんか変なことされたりしてない？」

「う、うん。ちよつとしつこくて怖かったけど」

「ったく、こんなところでナンパとかすんなよなあ」

男の人が走り去った方に再び視線を戻し、お兄ちゃんはぶつぶつ文句を言う。私も同感。

でも、そんなことよりさっきのお兄ちゃんの言葉。

俺のカノジヨって。それって私のこと、だよな？　それってつまり。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「さっき、私のこと……カ、カノジヨって言ったよね？」

私の言葉にお兄ちゃんは私が気分を害したと勘違いしてるみたい。さっきの頼もしい姿とはまるで別人のように、かなりわたたしなから

「あー、えーっと、ごめんね。ほら、知り合いつて言うよりカ

ノジョって言った方が効果あるっていうかなんていうか……その、嫌だったよね、いきなりそんなこと言われたら」

そう謝ってくる。

少しも嫌じゃなかったのに。ううん、むしろ、嬉しかった。そう言ってもらえて。

だから。

「嫌じゃ、なかったよ」

「え？」

「お兄ちゃんのカノジョって言われたの、嫌じゃなかったよ」

私は私の気持ちを素直に伝えた。

ドキドキと心臓が早鐘を打つ。上手くお兄ちゃんの顔が見れなくて、目を伏せる。

お兄ちゃんは、今、どんな顔してるんだろう。今の私の言葉をどう思ったんだろう。

お兄ちゃんは何も言わない。

周囲はざわざわと騒がしいのに、私たちの周りだけ音が消えてなくなったみたい。

私は耐え切れなくなって視線をあげた。と、同時に、手に、手の感触。

びつくりしてお兄ちゃんを見ると、お兄ちゃんは「よかった」と、はにかんだ笑みを浮かべて言った。

よかった？

一瞬、意味が分からなくて？マークが頭に浮かぶ。

でも、すぐに気づく。私が嫌がってなくてよかったってことかなって。

そういうことじゃなくて……本当はもっと別の言葉を望んでいたんだけど。繋いだ手からストリートにお兄ちゃんの思いが伝わってきて、今日のところはこれでいいやって思ってしまう。

私は、お兄ちゃんの手をぎゅうつと握りかえす。

お兄ちゃんは、一瞬ビックリしたようだけど、同じようにぎゅっとしてくれた。

「な、なにを見て回ろうか？」

照れ隠しなのか、お兄ちゃんが唐突に聞いてくる。

けど、正直、私はもうこのまま帰りたい気分。幸い、クラスの仕事は終わっているし――

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「今日はもう帰ろっか？」

「え？ いいの？」

「うん。お仕事ない人は、いつでも帰っていいことになってるから。ほら、結構、帰ってる人たちがいるでしょ」

そう言っつて、窓の外を見やる。お兄ちゃんもそちらに視線を動かす。

「亜美ちゃんの学校ってホント自由だね」

「うん。私もそう思う」

「じゃ、帰ろっか。家まで送るよ」

「ありがとー。あ、そういえば、菊池さんは？ 一緒じゃなかったの？」

さっきのこたこたでうつかりしてたけど、お兄ちゃんは助けてくれた時からずっと一人だ。菊池さんの姿が見当たらない。

「ああ、菊池さんなら亜美ちゃんのメイド姿が見れたから満足とか言って帰ったよ」

「そ、そうなんだ……」

さすがに私のメイド姿目当てってことはないだろう。もしかして、気を遣ってくれたのかな？

とにかく、二人つきりなことに感謝しながら、私はお兄ちゃんと手を繋いで家に帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7471x/>

カテキョ

2011年11月27日09時57分発行